

山田寺東回廊の調査

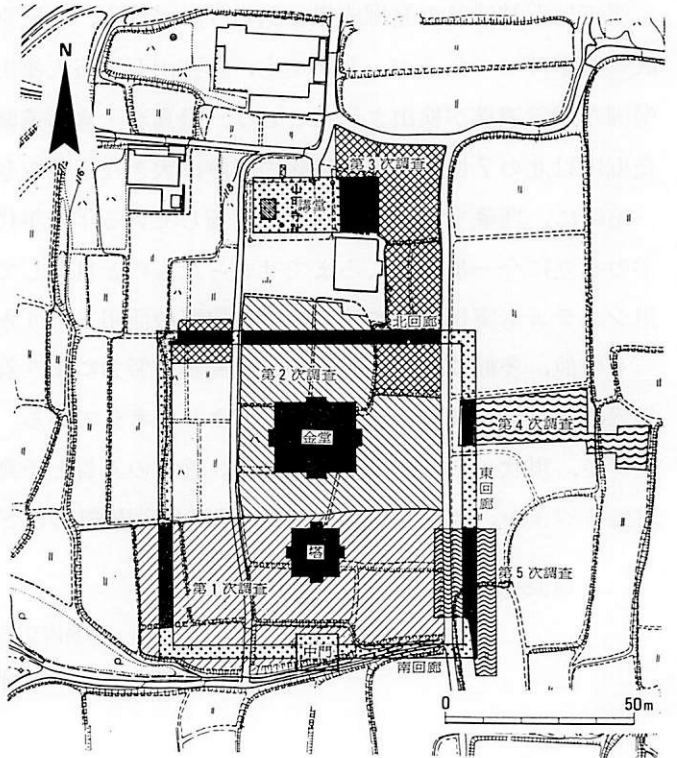
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

昨年度の調査では、東回廊の建物が倒壊した状態でみづかり、大きな話題となった。大量の建築部材は、遺存状況も良く、回廊建物の上部構造を知る上で大きな手掛りとなった。今回は回廊建物のより詳細な復原資料を得ること、東回廊南北規模を確定することなどを目的として調査を実施した。調査地区は、第4次調査地の一部（東回廊北から15・16間目）を北端に含めた南北40m、東西15mの範囲である。調査の結果、第4次調査につづいてさらに南に、倒壊した状態の東回廊建物そのものを検出するとともに、東南隅の礎石の発見によって、回廊の南北規模を決定することができた。

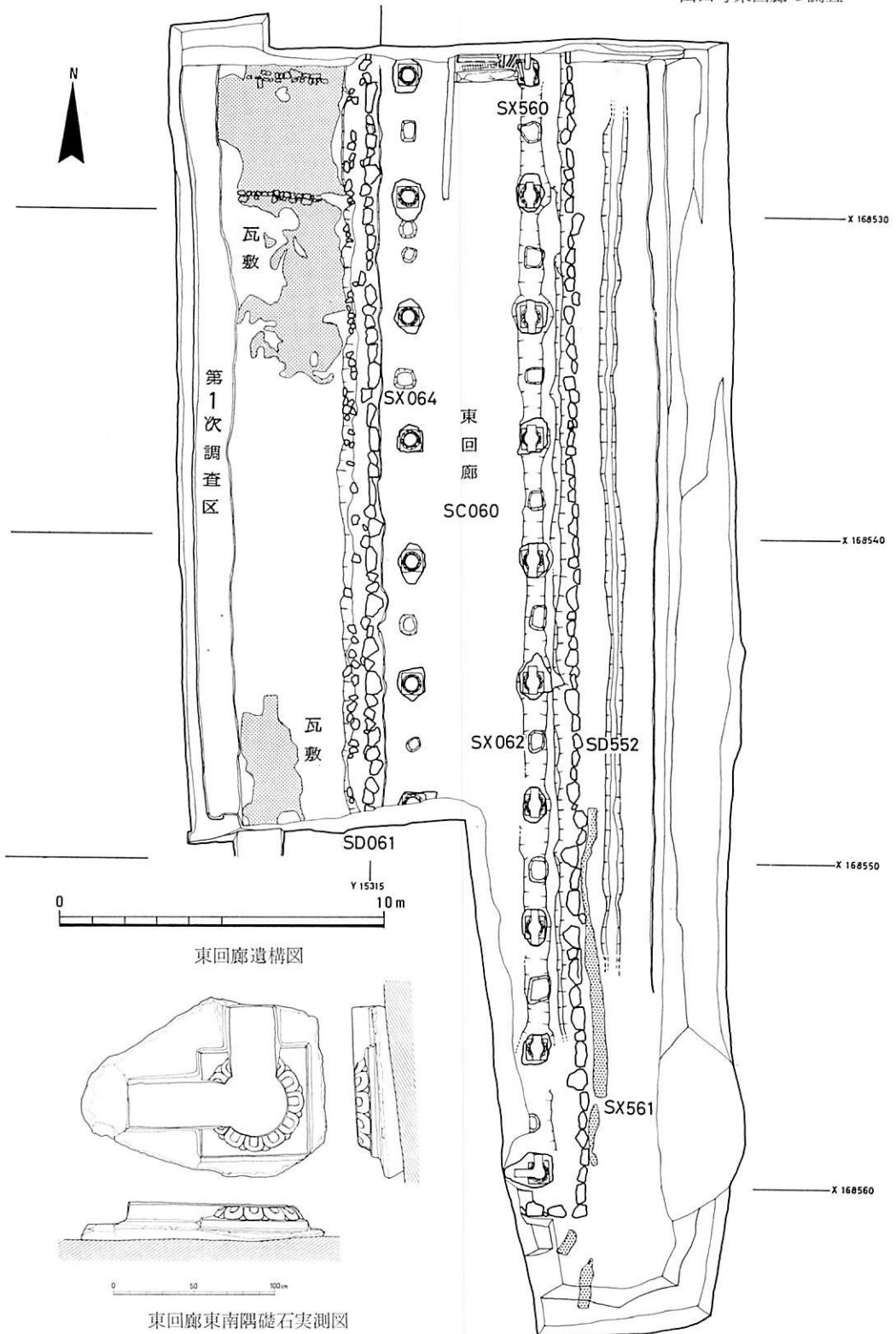
回廊 検出した部分は、東回廊の北端から15～23間目の計9間分にあたる。南北規模についてはこれまで22間あるいは23間と推定されてきたが、東南隅の礎石が確認でき、23間であることが判明した。

調査地の土層は、上層から耕土・床土・灰褐色砂混り粘質土・灰色砂混り粘質土・暗青灰色砂混り粘質土・暗茶褐色粘質土・暗青灰色粘質土・回廊基壇土の順序である。暗茶褐色粘質土中には、多量の瓦と回廊部材が含まれていた。また、その上層の暗青灰色砂混り粘質土層から床土直下にかけては砂と粘質土が複雑に入り混り、土砂の流入・堆積が繰り返された状況がみられた。

回廊は土間床の単廊である。古墳時代の遺物を含む層および花崗岩風化土を平坦に整地した後、版築をおこなって基壇を築成している。基壇縁には回廊内外とも花崗岩自然石を一段立て並べて化粧としており、西(内)側のみ雨落溝を設ける。基壇幅は6.4m、礎石上面までの基壇高は東(外)側で約60cm、西側で約45cmである。基壇西側にはパラス敷とその下層の瓦敷がみられる。このパラス敷は、10世紀代に回廊内全体にわたって敷



山田寺調査位置図



きつめられたものと一連のもので、その下層の瓦敷は8世紀中～後半頃のものである。

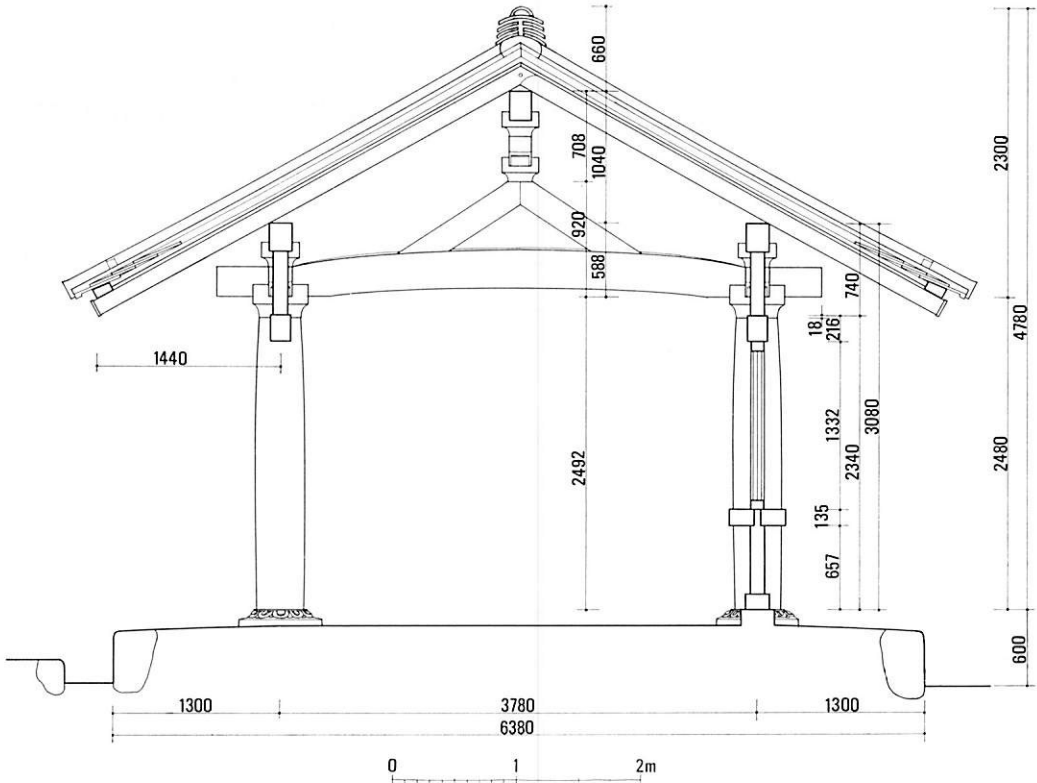
礎石はすべて花崗岩製で、一辺約65cm、高さ約5cmの方座の上に、上面径約42cm、高さ約7cmの円形蓮華座が造り出されている。東側礎石には、連子窓が連なるため、それぞれ南北に地覆座が造り出している。これに対して西側には、各柱間が開放になるので地覆座はない。また、東南隅の礎石は北と西の矩折れに地覆座をとまう。柱間は桁行・梁間とも礎石心々で3.78m(1尺=36cmの高麗尺で10.5尺)の等間である。

建築部材と屋根瓦 回廊基壇上には多量の瓦が全面に覆い被さり、基壇西端から約3m西側にまで拡がっていた。屋根にのっていた瓦が落下して堆積したもので、こうした状況から回廊は東から西に向かって倒壊したと思われる。瓦堆積の下から出土した建築部材も東から西に倒れた状態を示し、このことを裏付けている。

瓦の堆積は基壇上面で厚さ20cmにも及ぶが、回廊基壇17～20間目にかけては、屋根瓦が20数列屋根からそのままずり落ちた状態で出土している。このことから回廊の屋根の本瓦葺は平瓦二枚重ねで葺かれ、葺き足が長いことが判明した。一方、軒瓦の落下状況をみると、東側柱筋の基壇上面と西側雨落溝の西1～3mの範囲に軒平瓦が集中するのに対して、軒丸瓦や垂木先瓦は基壇のすぐ外側に多くみられる。このことから、軒丸瓦や垂木先瓦は、回廊倒壊以前にすでにかなりの数量が軒先から落下していたものと思われ、倒壊以前に回廊の荒廃が進んでいたことが知られる。

瓦堆積を取り除いた基壇面直上および雨落溝西側のバラス敷上面で建築部材を検出した。部材は、北方3間分が比較的原位置に近い状態で倒れているのに対して、それ以南は広範囲にわたって散乱している。

部材には、柱や頭貫・連子窓などのほか、今回新たに出土したものに大斗・虹梁・肘木・巻斗・桁・垂木・垂木込栓・茅負・屋根板などがある。大斗は全体幅43.5cm、斗尻幅31.5cm、全体成25cmである。法隆寺金堂・回廊等にみられる皿盤はない。大斗の上には虹梁、その上に肘木が組み合う。虹梁は中央に向ってのびのある曲線で反り上がる。上面中央から70cmほどのところに腐朽した窪みがあり、この位置に叉首が立っていたものと思われる。肘木は完全な形ではなかったが柱通りと棟通りの各1本がみつかった。木口は垂直、下端の曲線は比較的ゆるやかで、舌がつくりだされ、上面には笹線りがつけられている。巻斗は全体幅30cm、斗尻幅18.5cm、全体成19cmで、木口斗となる。柱上の三ツ斗は肘木と丸太柄で、棟通り肘木下の斗は叉首交点の柄で組み合わせられる。桁は角材で、一本だけ発見した。垂木は直径12.5cmの円垂木で、棟位置で相対する垂木と合わせて、円形の込栓を打つ。茅負はほぼL字型の断面を持ち、上面に直接瓦線をほどこす。屋根板は垂木の上に敷き並べて屋根下地としたもので、軒先部分ではさらにこの上に木舞を編んで瓦下地をつくったようである。壁は、木を割り裂いた木舞に荒壁をつけ、その上を直接白土で仕上げている。なお、使用木材の大半はヒノキ材であるが、柱はクス材(1本のみヒノキ)である。一部にケヤキ材の大斗や巻斗もみられる。



東回廊建物復原断面図

まとめ 昨年の第4次調査で出土した東回廊の建築部材に加え、今回の調査でも大量の部材がみつかった。特に第4次調査で出土しなかった組物や小屋架構材、軒廻り材が新たにみつき、さらに屋根瓦の葺き方までわかったことは大きな成果であった。これらの資料をもとに上図のような復原断面図を作成することができたが、飛鳥時代の様式を現在に伝える法隆寺西院回廊と比較すると、柱の高さを含めて立ちあがりが高く、構成部材の断面も大きく、どっしりとしていて、細部ばかりでなく全体の意匠にも大きな差異がある。このように飛鳥時代建築を考える上で新しい一例を加えたことの意義は大きい。

また、第4・5次調査を通じて、東回廊の歴史的沿革をほぼ明らかにすることができた。まず、造営年代は金堂と余り隔たらない7世紀中頃と考えられ、塔や講堂はやや遅れて7世紀後半頃完成する。その後、9世紀前半～中頃に地覆石の一部が抜き取られるなど回廊は改修を受けた様子がみられるが、10世紀代には屋根の軒部分を中心に荒廃もかなり進み、10世紀末～11世紀前半頃に至って倒壊する。このように多くの事実が明らかになったが、東回廊については、東北隅の確定や中央部分に予想される出入口の確認など、究明すべき問題が今後に残されている。山田寺全体についても、南門や寺域の確認、僧房等の諸施設を明らかにすることが重要な課題である。

(村上 一)